
Jack of all trades

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jack of all trades

【著者名】

N1149BA

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

「何でも屋」で名のしれている彰士とちあの一二人組。そんな二人にとある依頼が！？ 短編はコチラ【<http://niconode.sysosetu.com/s5635a/>】

case1 ストーカー（前書き）

編集めんどくせーかつたです
やめました 噛みました やめました

case1 ストーカー

るるる、と鳴り響く電話の音。出たのは長身の一十代に入つてそ
うな好青年。

彼は吸つていた煙草を口から外し、「もしもしいー？」と酒に酔つ
たような（ていうか酔つてるんだけど）声を出す。

「……依頼だな、ああ、分かつた、あ、いえ！ 分かりましたあ～～

」

上から田線な態度が一変する。声色が気持ち悪い。

「ちあ、出るぞ」

ちあ、というのは彼・彰士のパートナーであり仕事仲間。
姿勢こまるで女の子だが彼は男。茶髪のロングストレートは地毛
である。

こう見ていると、クールな彼氏に少し童顔な彼女という恋人同士に
しか見えないだろう。

「お仕事なの？」

まあ、恋人同士に見えるときは、彼らの仕事を知らぬ間だけだろ
う。

「今日は護衛だ」

「ふーん、そう」

淡々と短くかつスピーディーに話をする一人。

「服は？」と、ちあ。

「あつちで手配してくれる」

「OKじゃ、行こうか」

「車で行くが高級車はまずいよな

「歩いて、で」

「……」

* *

ぴん、ぽーん…、と。恨みも込めて彰士はインター ホンを押す。
別段近いわけでもなくだが遠いとも言い難い…そんな微妙な距離を
「まだ時間がある」「ウォーキング」という理由で（逆らうと結果
が怖い）歩いてきたのだ。

当人はとても満足げだったので、怒る気もせずせめてもとインター
ホンにハツ当たりする情けない大人だった。

ドア…というより扉が開くのがすごく遅い。本当にしばらくして
バタバタと数人の足音。

「…玄関までが遠いんだね」

「俺たちの家もだいぶデカいけどなあ」

「」のうちに豪邸よりは遙かに小さいが。

「お、お待たせしました！何分、邸内でも迷つてしまい…」

迷うほどの大ささである。玄関だけ見ても、一軒家一つ分…ぐら
いあつた。無論比喩だが…比喩…にならないぐら…

「…お邪魔します」

「」案内申し上げます

「問題ないです！」一人で行けます！」

「はあ…？何言つてんのお前…！」

「うつさい。お仕事多そうですしお休みなさつてていーですよー」
ひらひら、と手を振る。メイドさん達は「では、お言葉に甘えて」
と言つて本当に帰つてしまつた。

「…おい、いーのかよ」

「大丈夫。護衛をするんだつたら盗聴器あげないとね」
おみやげ

「…ふん」

* *

「おお…よく来てくださつた！」
「遅れて申し訳ない。手土産をやるつか」

と、自分の手柄でもない盗聴器を『やがれやがれ』と投げてへ
彰士。

田分量でもう〇はあるだろ？

「……」

「盗聴器だよ。この屋敷は広いからまだあると懶つたが、僕、あ、
いや、『私たち』の取れる分だけ取つて來たよ」

「……申し訳、ありません……」

ゆつくりと、この屋敷の主は謝つた。

「謝罪なんかいらぬーよ、内容をくれ」

「……わかりました」

case 2 ストーカー？

「……と言つて『ござります』

「娘さんがねえ…」

「……はい。」

内容は、こうだった。

彼には一人娘がいて、とても綺麗で可愛くて優しくてピアノが上手くて成績優秀。

絵に描いたようなまさにお嬢様、だった。

彼女にも欠点があつて…それは、「男嫌い」。年も18。結婚も控えているのに「男嫌い」。

そして、ある日。彼女は嫌ながらも父のため、お見合いをした。きちんと断つたのだが、その相手が相手で諦めきれず財力を駆使したストーカー行為を始めたのだ。

ここまで聞けばわかると思うが、彼ら二人の任務は『ストーカー行為から彼女を守り、ストーカー行為を止める』こと。

「……だけどなあ…」

「何か…？」

「俺ら男じゃん？」

「え？いや、でも、ちあ様は…」

「私は男だよ。女装好きかな」

「…、まあいいです。隣室に服を用意してありますので」

「えーっと、まず、お嬢様に会う…か」

「それは私がする？」

「ん、頼んだ」

護衛と言えば、やはりメイドや執事。ちあはメイド服で、彰士が

執事

そして、今はその“お嬢様”的自室前である。
ちあが、コンコンと一度ほどノックすると中から「ひづえ」と声が返
つて来た。

失礼します

女装したちあが男嫌いの少女の部屋へ一人入つていった。
「アホがアツレも俺はう前を忘れな」と

（…中で何かあつても俺はお前を忘れない）

「可い!!!!!!?

あまつの驚きに、ドアを開ナ

「やああああああああ？」

(· (H) ·) 開(· (H) ·)

「…よ、寄らないで！－あ、あなたが新しい護衛ね…精々死はないことね！－！」

どんな捨て台詞。彼女は、この風間家の一人娘・菜苗。ななえ

「大丈夫ですよーう。私たちはお嬢様の身を守る者です。死にはし

四百九

「11人です」

「え？」

「11人。英語で言いましょうか? elevenですよ」

菜苗は、一 わ わか て る わ ん ! ！ と 鰐 も 血 脂 に 罷 か い る と
い う 状 況 に 震 え た 声 を 混 ぜ 合 わ せ 言 つ。

「...טערנ...」

「何故知つてゐるのか、なんて後回しです。さ、今日は学校に行く

田でしょ」「

「…嫌よ、行きたくないわ」

「……無理強いはしませんよ。じゃ、私たちは出でいきますかね。
行こ、彰士

「ん？ああ、煙草吸いてえしな」

彼女が学校に行かない理由。それは単純。

“みんなを傷つけたくないから”。

彼女にふりかかっている“不幸”^{ストーカー}は、ただ個人情報を盗んだり、後ろについてきているだけじゃない。周りに近づくものをすべて抹殺し、消した。

だから、護衛が、死んだ。

彼女は、優しいんだ。

傷つくのは苦しむのは悲しいのは私一人でいい。そうやって、

「そいやって生きてきたんだろうなあのガキは」

「だらうね。」

護衛が、守るどいろか守られる立場になっていた。皮肉な話である。

「さて、ちょっと豪邸さんの外周を掃除するかね」「僕もする」

と、ちあは黒い長い傘を取り出した。

ちあが元々小さいのもそうだが、その傘には60センチでも55センチでもましてや70センチでもなかつた。

100センチ。1メートル傘。彼はこれを用いて 戦つのだ。

* *

庭のストーカーたちが片付いたと同時に、菜苗の部屋から彼女のものらしき悲鳴。

きっと一人を外に追いやりように外周に雑魚を並べたのは、部屋を、菜苗を一人にするためだろう。

今更気付いてなんだ、って話。

「 ッチ！ 手が早すぎんじゃねーの！？」

「 …どうせメイドとかにでも紛れてんでしょう」

菜苗の部屋に繋がるテラスの真下に来る。

「 …鈍つてるから行けるかな」

「 行けるんじゃねーよ。行くんだよ」

テラスとは逆方向にある大木に向かつて走る二人。

それを器用に蹴り、跳躍する。勢いあまり、ガラスをぶち破つて入る。

「 お嬢様あ？ 大丈夫 」

と、問う暇もない。田の前には、ナイフを突きつけられた主の姿。ななえ

「 …ち…おい、離せよ」

「 嫌だと、言えば？」

「 殺^やるしかねーな」

case 3 ストーカー？

「殺るしかねーな」

「おやおや、怖い」

と、回していた手とナイフを外す。

当の菜苗は肩で大きく息をしていた。相当、怖かつたんだろう。

「……たーだーし」

「？」

「殺るのは、俺じゃねーよ」

「な、しまつ」

“もう一人を忘れていた”。

気配に気づいて振り返ったのは、もう遅い。
後ろには思い切り1メートル傘を振りかぶり、鬼のような形相で居る　ちあがいた。

あとは一瞬。傘の“バキ”という音でなく、まるで鉛でも当たつような“ゴン”という鈍い音。

「……女じやねーのに触んなクズ」

一字一句間違えず、二人は言った。

「……その、ありがとう…」

「いや、そーいう任務だし」

「はい。問題ないです！」

「……ちょっと、男の人見直しました」

ぽつりといった言葉は、ちあにしか届かなかつた。

仲間を一人殺された敵側は、数日間何の反応も見せなかつた。
だからこそ、警戒が必要である。

氣を抜かせつつ、奇襲。それは当然の策戦であり、作戦。

あの日から、菜苗は学校に行くようになった。

きっと、一人の強さを認め安心したんだろう。いいことである。そして当然の「」とく女子校のため入校はちあだけが許された。一人寂しく彰士は外回りの護衛。

「ショージーー！」

と、玄関から駆けてくるのはちあ。

「お、おい、お前護衛…………」

「……それどこにいじやないーー！……が、菜苗が消えたーー！」

「……ああ？」

ちあの言つとおりでは、授業と授業の合間。つまり、休み時間に消えたのだ。

「……ち、今日は手強いぜ」

ちあが護衛を怠つたんじやない。その護衛を上回るほどの 技術。

ぴ、ぴ、と自分の携帯をいじる彰士。と、それを覗き込むちあ。あらかじめ、発信機をつけておいたのだ。無論秘密だが。

「いた！……尋常じやねえ速さだな……？って、あれ？俺らの……上？」「と、上を向くと

ぱらぱら、ヒベリロプターが飛んでいた。

「つぐそーー！ちあーー！撃ち落とせるか！？」

「え、やだ。出来るけど、傘無駄になる」

「つぐそーー！」

いろいろな意味で怒りの混じつた「くそ」を吐いた。

* *

発信機に導かれ、たどり着いたのは廃工場。

まるで、一人をここで待つてゐるようだつた。否、誘つてゐるんだ
るつ。

「いいか、遅れたら蜂の巣だ。」

「いつせーの、でー、で走るんでしょ」

「ああ、いつせーの…で！」

「人が全く同じ速度で走り出すと、銃弾の雨。ちあはそれを“傘
でなぎ払つていぐ”。

建物の中に入ると、ロープに縛られた菜苗と犯人、否、見合い相手
がいた。

「お疲れ様、ボディーガードさん」

「なめてもらひうど困るぜ」

「そうだよ。ボディーガードは“仕事内容”。私たちの仕事は」

「「何でも屋」」a c k o f a l l t r a d e s 「」」

それだけ聞くと、見合い相手の血の気が引く。

「……はふははははは！わ、笑わせてくれる……嘘をつくな……

その組織はひ弱そうなガキと二十代の男だけじゃなかつたはずだ

ぞ！！」

流石に名前は知つてゐるらしい。どれほど、有名で強いのかを。

「無理だよ」

「何がだ」

「ごめんね」

「だから…」

そこで、彼はハツとする。

“周りの気配がないことに”。 “彼らに奇襲が銃弾が当たらないこ
とに”。

「全部、倒しちゃつたんだ」

case 4 ストーカー？

「全部、倒しちゃったんだ」

「…………」

いつの間に？それは、ほんの少し前。銃弾の函を、函の中をぐぐつてきたとき。

“ちあは、傘で弾丸を全てなぎ払った”

つまり、つまりとにかく

それは、跳ね返つたことになる。ここにひとときは

「……は、跳ね返しつつ……当たたとこづのか？――」

「そう」

そして、見合いで相手は、耳を澄ます。

「…………嘘だ、嘘だ……それだけじゃない……全て、全て“急所を外してある”……だと……？」

そう、“生きてこる”。当たったのは腕や太ももなど、死にはしない場所。

ちあは、弾丸の雨をよけつつ、更に相手を狙いだが殺さず。そして自分より背が遙かに高い彰士に合わせ走る。

この行為を全てやってのけたのだ。

「……ひ、ひい……わ、わたしは一体誰を……倒さうと……」

自分の愚かさ、弱さに気が付く。

「そう、そして更に。こんなちつこちつあでも“この程度のこと”ができる。

「つーことは、単純に？」

「あ……」「、殺さな……で……な、なんでもするー金かー?・金だなー?・金ぐぐ、と強く強く拳を握る。

「俺はもつと強いつことだよーーー！」

渾身の一発。

殴られた本人はもつと痛いが、聞いている“音”だけでもだいぶ大きく、工場が響く構造だからと言つても、その殴った音は、鼓膜を破るかとも思わせた。

「俺たちに挑むんじゃ、一〇〇年あっても足りねーよ、クズ」

こうして、タラシなもやし相手をした最強の仕事は終わった。

* * *

後日、その事実を知つた彼の両親は、物凄く腫れた頬を携えた本人を連れ謝罪に来た。

これで、彼ら何でも屋の仕事は、終わり。報酬（相手もくれたので二倍）をしつかりもらつて、帰るところだった。

「ま、待つて……」

と、二人を呼び止めたのは意外な人物。

菜苗だった。

「ひゅう」と、ちあ。

「…？ 何だよ。もう仕事は終わつたぜ」

「ううん、…それについては、ありがとう。新しく一步踏み出せるわ」

につこり、笑つた。本当の彼女。

不安も何もない。檻から飛び出せた自由な笑顔。

その笑顔を見て二人は安心した。

「彰士さん、ちょっと耳貸して

「？」

言われた通りに耳を貸すため腰を下げる

「… も…」

頬に軽くキスされた。

「… 立派な女になつて、貴方のもとへもう一度向かいますから」

「ちよ、あ、え…？」

「やるじやん。見直したぜ、しょーじやんっ？」

「… むせえ…！」

まるで表情を隠す様に、煙草を吸う。

それを見て、ちあが不適に笑む。

「… きっと、菜苗ちゃんが好きになつたのは他でも無い彰士の優しさ、だよね

彼に聞こえそうで聞こえない声。

そんな微妙な声で、そつ secara に早歩きの彼を追つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1149ba/>

Jack of all trades

2012年1月5日22時51分発行